

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：52201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K01029

研究課題名（和文）ジョチ朝（モンゴル帝国）解体・再編史再構築のための後期ジョチ朝諸政権史料の研究

研究課題名（英文）A Study on the Historical Sources of the Later Jochid States for Reconstructing the History of Dismantling and Reorganization of the Jochids (the Mongol Empire)

研究代表者

長峰 博之（Nagamine, Hiroyuki）

小山工業高等専門学校・一般科・准教授

研究者番号：00825672

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ジョチ・ウルス後裔政権史料の文献学的研究および写本調査により、モンゴル帝国時代に関する歴史的知識を抽出すること、また、後代がいかにモンゴル帝国時代を認識していたか、チンギス家/ジョチ家の権威がいかに保持され、あるいは変容したかを明らかにすることにある。おもな成果として、ジョチ・ウルス後裔政権史料がラシード『集史』とティムール朝史料（『勝利の書』）を融合したテュルク・モンゴル伝承を受け継いでいたこと、また、「ジョチ家/ジョチ・ウルス」への帰属意識が保持され、これら諸史料がジョチ・ウルスの解体を、ジョチ家内のトカ・テムル家とシバン家諸王統による再編と認識していたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

歴史研究において同時代史料が第一級の価値を有することは言うまでもないが、周知のように、ジョチ・ウルス（モンゴル帝国）内で著された同時代史料はきわめて少ない。しかし、16世紀以降、ジョチ・ウルス後裔政権内部において独自の情報を含む史料が著される。本研究の学術的意義は、これらの史料からモンゴル帝国時代に関する独自の歴史的知識を抽出したこと、その歴史認識の分析からジョチ・ウルスの後代への影響および後代がジョチ・ウルスをどのように認識していたかを明らかにしたことにある。これにより、これらの史料の新たな可能性を示した。また、モンゴル帝国時代とその後の「不連続性」を強調する歴史観の再考にも寄与した。

研究成果の概要（英文）：Through a philological study and manuscript research of the Later Jochid sources, the aim of this study is to extract historical knowledge about the Mongol Empire period from these sources, and to determine how the Later Jochid states understood the Mongol Empire period and how the authority of the Chinggisids/Jochids was retained or transformed. The main findings are follows: (1) the Later Jochid sources inherited the Turco-Mongolian tradition that combined Rashid al-Din's Jami al-Tawarikh and the Timurid sources (Yazdi's Zafar-nama); (2) the perception of belonging to the Jochids/Jochid Ulus was retained, and these sources recognized the disintegration of the Jochid Ulus as a reorganization by the Tuqa Temurid and Shibaniid families from the Jochids.

研究分野：ジョチ・ウルスとその後裔政権史

キーワード：ジョチ・ウルス ジョチ・ウルス後裔政権史料 歴史認識 モンゴル帝国

1. 研究開始当初の背景

歴史研究において同時代史料が第一級の価値を有することは言うまでもない。しかし、ジョチ・ウルス(モンゴル帝国)史研究において同時代史料は少なく、かつ、同時代史料ではあるがジョチ・ウルスについては誤りの多い隣接諸地域の史料に依拠したために、しばしば研究上の混乱が生じた。例えば、ジョチ・ウルスの国家体制について研究上の混乱が生じたが、その問題解決において重要な役割をはたしたのが、後代のヒヴァ・ハン国史料『チンギズ・ナーマ』であった。この問題に触れた経験が、本科研代表者を同時代史料だけでなくジョチ・ウルス後裔政権史料を重視する研究姿勢へと向かわせた。以後、本科研代表者はジョチ・ウルス後裔政権史料の研究に取り組むなかで、史実の追及だけでなく、そこに潜む歴史認識を抽出することで従来の歴史像を再考することができることに注目するようになった。

ジョチ・ウルス後裔政権史料については、旧ソ連圏や欧米を中心とした研究の蓄積がある。本科研代表者も『チンギズ・ナーマ』、カーディル・アリー・ベグの史書、『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』などについての研究を進めてきた。また、カザンやセゲドにおいて『諸情報の要諦』『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』『チンギズ・ナーマ』の新しいテキストが刊行されたことは高く評価できる。ただし、先行研究におけるこれらの史料の「前時代史」部分の利用の仕方はまだ断片的であり、また、利用の際には刊行されている不十分なテキストに依拠する 경우가多く、結果、学術的な信頼性に欠ける議論に陥る場合が少なくない。加えて、主に史実の追及のためだけにこれらを用いており、そこからジョチ・ウルス後裔政権内部の歴史認識を探ろうとする研究はまだ十分にはなされていない。この問題に取り組むためには、刊行されているテキストのみに依拠するのではなく、写本に遡って厳密な史料批判を経てこれらの史料を積極的に利用する必要がある。

2. 研究の目的

ジョチ・ウルス(モンゴル帝国)史研究はこれまでいくつかの問題を抱えてきた。まず、遊牧民自身による史料不足のため、これまで多くのジョチ・ウルス史研究は周辺勢力で著された諸史料の断片的な記述に依拠せざるをえず、そこには依然として不明な点が多く残され、ときに研究上の混乱が生じてきた。とくに、ジョチ・ウルス(モンゴル帝国)の解体・再編期である14世紀後半～15世紀に関しては不明な点や研究上の混乱が多く残されており、その解明は世界史上におけるジョチ・ウルス(モンゴル帝国)の後代への影響を考察するうえできわめて重要な「問い」である。それと関連して、モンゴル帝国時代(13～14世紀)とその後(15世紀以降)の「不連続性」を過度に強調する歴史観がある。そのような歴史観に立つとき、15世紀以降はジョチ・ウルス「消滅」後の新しい時代と捉えられ、また例えば、ジョチ・ウルスとロシアの関係は単純化されてロシアがジョチ・ウルス後裔政権を征服していく「対立」の時代と捉えられてきた。そのような歴史観は現在の中央ユーラシア諸民族の民族史観とも結びつき、例えば、15世紀後半のカザフ・ハン国の成立をもって現在の「カザフ民族」が新たに形成されたとされてきた。

しかし、およそ16世紀以降になると、ジョチ・ウルス後裔政権内部においてモンゴル帝国時代についても独自の情報を含む諸史料が著されるようになる。これらの史料は、「チンギス統原理(チンギス家の男系子孫以外はハン位に就くことができない)」によってその政権の正統性を示そうとした。古くからその存在が知られていたにも関わらず、これらの史料の「前時代史」部分はその後代性や伝承的要素などにより等閑視されがちであり、断片的な利用にとどまってきた。しかしこれらは、遊牧社会の口承伝承を背景とした歴史的知識や政権内部に保持された史料に基づく独自の情報を含むものであり、そこに史実あるいは史実の反映を読み取ることは十分に可能と考える。ジョチ・ウルス後裔政権史料に現れる独自の情報を同時代史料の記述と批判的に比較・検討していくことによって、新たな史実にせまることが可能になるだろう。また同時に、ジョチ・ウルス後裔政権内部の歴史認識が看取される点でも、これらの史料は大きな可能性を秘めている。そこにおいては、モンゴル帝国時代からの「連続性」が強く意識されており、15世紀以降も「ジョチ・ウルス」という形が生き続け、ジョチ家以来の支配の正統性が保持されていたことが明らかとなる。また、ジョチ・ウルス後裔政権そしてロシア内部においても「チンギス統原理」が機能し続けた「共生」の時代があったこと、さらに、カザフ・ハン国内部においてはジョチ家(チンギス家)であるという意識は強く見られるが、現在の「カザフ民族」意識はまだ見られないことなども明らかとなる。すなわち、ジョチ・ウルス後裔政権内部の歴史認識をふまえることによって、従来のモンゴル帝国時代からの「不連続性」を前提とする歴史像を再考することが可能となるのである。

一方、ジョチ・ウルス後裔政権史料が共有する「チンギス統原理」はモンゴル帝国の後代への影響を考察する際のきわめて有効な分析要素となるが、「チンギス統原理」は地域・時代によって変容が見られる。ジョチ・ウルス後裔政権史料の分析から「チンギス統原理」の変容を明らかにすることも、ジョチ・ウルス(モンゴル帝国)の後代への影響を解明するための重要な「問い」

となるだろう。

以上のような問題意識に基づき、ジョチ・ウルス後裔政権史料からモンゴル帝国時代に関する独自の歴史的知識を抽出して研究上の混乱を解決すること、また、これらの諸史料に潜む歴史認識を抽出してジョチ・ウルス(モンゴル帝国)の後代への影響および後代がジョチ・ウルスをどのように認識していたかを明らかにすることにより、ジョチ・ウルス(モンゴル帝国)史の解体・再編史を再構築することが本研究の目的である。その際、「チンギス統原理」の保持そして変容、ジョチ家以来の支配の正統性の認識に注目する。

3. 研究の方法

前述のように、これらのジョチ・ウルス後裔政権史料の「前時代史」部分はこれまで等閑視されがちであり、国内外におけるその利用は断片的なものにとどまってきた。また、これらの史料のうち、その大部分に関して信頼できる校訂テキストはいまだ編まれておらず、その内容についても十分には明らかにされていない。加えて、部分的な校訂テキストや訳がある場合でも、それは各史料の同時代史の部分であり、「前時代史」部分は含まれていない。これらの史料を積極的かつ批判的にジョチ・ウルス史研究に利用するためには、その文献学的研究が急務である。具体的には、以下の諸史料の文献学的研究、写本調査を行った。カシモフ・ハン国史料のカーディル・アリー・ベグの史書、ヴォルガ・ウラル地方史料の『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』、シャイバーン朝、ジャーン朝諸史料、クリミア・ハン国諸史料。

実施した写本調査は以下である。ウクライナ国立図書館(クリミア・ハン国史料『簡史』など)、カザン大学図書館(カーディル・アリー・ベグの史書、『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』など)、タシュケント東洋学研究所(シャイバーン朝史料『諸史精髓』、ジャーン朝史料『神秘の海』など)。残念ながら、コロナ禍のため、当初予定していた写本調査のすべては行うことはできなかった。

4. 研究成果

論文「On the Jadwal of Kok Orda and Aq Orda in the Paris Manuscript of Muntakhab al-Tawarikh-i Mu'ini」「Сыгнал как «порт Дашт-и Кыпчака» и «город-мавзолей»」においては、これまで注目されてこなかったティムール朝史料『ムイーン史選』パリ写本の王朝表(jadwal)に注目し、シル川流域のスグナクの「墓廟都市」としての性格について論じた。注目されるのは、王朝表とジョチ・ウルス後裔政権史料に共有される情報があることである。このことは、ジョチ・ウルスおよび後裔政権における歴史的知識の伝播を考えるうえで非常に重要な手がかりになると思われる。関連して、報告「Джадвал в парижской рукописи «Мунтахаб ат-Таварих-и Му'ини» и «Синоптическая история»」(英語論文として掲載予定)および論文「Джучи в джадвале «Мунтахаб ат-таварих-и Му'ини» и Торкарı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, B. 411」(掲載予定)においては、『ムイーン史選』の王朝表およびトプカプ宮殿博物館図書館 B.411 写本のジョチ・ウルスに関する部分の分析を行った。

論文「17世紀末ヴォルガ・ウラル地方史料『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』の4写本」(掲載予定)においては、これまで注目されてこなかった『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』4写本の独自の情報を抽出・分析し、ヴォルガ・ウラル地方における歴史認識の変容、知の伝播のあり方について検討した。写本調査を通じて明らかになるのは、『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』やカーディル・アリー・ベグの史書、ヒヴァ・ハン国史料の『テュルク系譜』が後代においてよく参照されたことである。このこともまた、ジョチ・ウルス後裔政権史料における歴史的知識や歴史認識を考えるうえで重要な手がかりになるだろう。

論文「サライはどこに? : ジョチ・ウルスの「首都」サライをめぐる近年の研究動向によせて」においては、サライの位置をめぐる近年の議論を紹介・分析した。あわせて、季節移動と首都圏、ハンたちの墓所の問題について、ジョチ・ウルス後裔政権も利用しながら検討した。

論文「ジョチ・ウルス後裔政権史料は何を参照し、ジョチ・ウルス再編をいかに認識したのか?」は本科研の最終的な成果物である。本科研で実施した写本調査もふまえて、ジョチ・ウルス後裔政権史料を網羅的に分析した。ジョチ・ウルス後裔政権史料がラシード『集史』を参照し続けたことは夙に指摘されてきたことであるが、同時に、ティムール朝史料(『勝利の書』)などをも参照し、『集史』系と『勝利の書』系を融合したテュルク・モンゴル伝承を受け継いでいたことを明らかにした。また、何らかのモンゴルの伝統を受け継ぐ歴史がその底流をなしていた可能性も指摘した。そして、ジョチ・ウルス後裔政権史料において「ジョチ家/ジョチ・ウルス」への帰属意識は保持され、これら諸史料が15世紀以降のジョチ・ウルスの解体・再編というものを、ジョチ・ウルス内の王統によって、具体的には、トカ・テムル家とシバン家諸王統によって再編されていったと認識していたことを明らかにした。ジョチ・ウルス後裔政権史料におけるトカ・テムル家とシバン家の認識については、報告「Тукай-Тимуриды, Шибаниды и Крымское ханство в сочинении Кадыр Али-бека」において発表した(掲載予定)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 長峰博之	4. 巻 19
2. 論文標題 17世紀末ヴォルガ・ウラル地方史料『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』の4写本： ロンドン、パリ、ベルリン、エディンバラ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本中央アジア学会報	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名	4. 巻 11(2)
2. 論文標題 - : ?	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長峰博之	4. 巻 95
2. 論文標題 サライはどこに？ ジョチ・ウルの「首都」サライをめぐる近年の研究動向によせて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西南アジア研究	6. 最初と最後の頁 76-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名	4. 巻 8
2. 論文標題 " - " " - " :	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名	6. 最初と最後の頁 533 ~ 551
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.22378/2313-6197.2020-8-3.533-551	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長峰博之	4. 巻 16
2. 論文標題 ゾロタヤ・オルダ750周年国際会議参加報告 付伝ジョチ・ハン廟参詣記	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本中央アジア学会報	6. 最初と最後の頁 58～66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名	4. 巻 9
2. 論文標題 : Noda J., Onuma T. A Collection of Documents from the Kazakh Sultans to the Qing Dynasty	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名	6. 最初と最後の頁 210～223
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.22378/2313-6197.2021-9-1.210-223	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件(うち招待講演 0件/うち国際学会 7件)

1. 発表者名 長峰博之
2. 発表標題 サライはどこに?: ジョチ・ウルスの都サライをめぐる近年の研究動向によせて
3. 学会等名 第57回野尻湖クルルタイ(日本アルタイ学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nagamine Hiroyuki
2. 発表標題 Where was Sarai, "the Capital City" of the Jochid Ulus?: New Perspectives for Research on Sarai
3. 学会等名 5th Meeting of the Mongol Empire Spring Series: By Land & By Sea: Cultural and Other Networks of Exchange in Mongol Eurasia and Beyond (Thessaloniki) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名
2. 発表標題
3. 学会等名 The Great Place-Golden Horde (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 長峰博之
2. 発表標題 後期ジョチ朝史料は何を参照し、いかにジョチ朝再編を認識したのか？
3. 学会等名 AA研共同利用・共同研究課題「近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照」研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 長峰博之
2. 発表標題 17世紀末ヴォルガ・ウラル地方史料『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』の4写本： ロンドン、パリ、ベルリン、エディンバラ
3. 学会等名 日本中央アジア学会2020年度年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名
2. 発表標題
3. 学会等名 VI (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長峰博之
2. 発表標題 ヴォルガ・ウラル地方の歴史叙述におけるチンギス家イメージの変容をめぐって
3. 学会等名 日本アルタイ学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名
2. 発表標題
3. 学会等名 : (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長峰博之
2. 発表標題 『テュルク系譜』エディンバラ写本補足のクリミアのハンたちに関する記述について
3. 学会等名 内陸アジア史学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nagamine Hiroyuki
2. 発表標題 Four Manuscripts of the Daftar-i Chingiz-nama: London, Paris, Berlin, and Edinburgh
3. 学会等名 Central Eurasian Studies Society 22nd Annual Conference (Indiana University) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名
2. 発表標題
3. 学会等名 () (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名
2. 発表標題
3. 学会等名 (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Hiroyuki Nagamine	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Qozha Akhmet Yasawi atyndaghy Khalyqaralyq qazaq-turik universiteti Euraziya ghylymi-zertteu instituty	5. 総ページ数 244
3. 書名 "On the Jadwal of Kok Orda and Aq Orda in the Paris Manuscript of Muntakhab al-Tawarikh-i Mu'ini," "Saryarqa jene Altyn Orda: waqyt pen kengistik" Altyn ordanyng 750 jyldyghyna arnalghan khalyqaralyq ghylymi konferentsiya, Materialdary, Qaraghandy, 23-25 qazan 2019 j.	

1. 著者名 長峰博之	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	5. 総ページ数 243
3. 書名 「ジョチ・ウルス後裔政権史料は何を参照し、ジョチ・ウルス再編をいかに認識したのか？」『近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------